

SY2-1

「子ども虐待に対し、開業小児科医は何ができるか？」
～子ども虐待防止に対する取り組み～

峯 真人

医療法人自然堂峯小児科

子ども虐待は最も治り難い病気、しかも最も危険な病気である。であればそれを予防し、早期に診断し治療するのは小児科医にとっての極普通の医療行為であるはずである。しかし医療機関から児童相談所への虐待報告は常に非常に少ない。特に地域の開業小児科医からの報告はさらに少ないのが実態である。1. なぜ一次医療機関が虐待対応に係われないか？残念ながら未だに虐待が子どもの重大な病気と捉えられていない状況がある。実際医療現場では受診した親子は診断と治療を目的に来院した基本的には弱者であることから、医師の面前に加害者と被害者が同時に存在することが起こることになる。ここで虐待を疑うことは患者と医師との信頼関係を大きく損なう恐れが出てくる。また虐待と認識したあとの対応の困難性も大きな問題である。しかし虐待が起こるかもしれないリスクについては少しの工夫で把握可能である。2. 保護者の有する虐待のリスクに気づけないか？開業小児科医は日常診療の中で子ども虐待のリスクに気づく場面は少なくないはずである。虐待者である保護者の持つリスクファクターとして、貧困・経済的不安定ひとり親家庭、家庭内不和、家族内に重症疾患が存在、育児に対する知識不足、養育姿勢の偏り、養育能力の不足、保護者の精神疾患や薬物・アルコール依存の存在、社会的孤立などが挙げられ、医師だけでなく様々な診療スタッフとの情報交換により、これらのリスクに気づくことは非常に重要である。3. 子ども自身が持つ被虐待のリスクに気づけないか？保護者にとってDifficult childと称せられる育て難い子どもたいは決して少なくない。例えば未熟児・多胎児・先天奇形疾患・染色体異常・重症心身障害児・慢性疾患罹患児・医療的ケア児・発達障害児・日常生活や習慣に問題がある児(食べない、夜眠らない、頑固な便秘、夜尿など)などである。彼らへの育児や教育、療育などは保護者にとって大きな負担となることは容易に想像される。日頃からの支援が虐待の予防への係りとして極めて重要である。4. 保護者と子どもの持つ虐待リスクを推し量れないか？医師やスタッフによる親子リスクの受け止めとして、子どもの持つリスクの程度、子どもの持つリスクへの親の感じ方、親の持つリスクの程度、親の持つリスクへの家族・周囲の感じ方、親子から感じる気になる雰囲気・印象、子どもの持つリスクの受け入れが良すぎる場合、両親同伴で受診時父親或いは母親やだけしか話をしない場合などは、気に掛ける必要がある。5. リスクを感じた場合のどのように対応したらよいか？医療機関内では他のスタッフからの情報収集は欠かせない。普段からかかわっている保育園・幼稚園・学校などからの情報を把握する努力も必要である。また最近健診や予防接種の個別化によりお互いの顔が見えにくくなっているが、保健センターとの情報交換は必須である。そして日常診療では面識が極めて少ない児童相談所への相談、民生委員・主任児童委員への協力依頼が必要な場合もある。6. 子ども虐待に対する開業小児科医の立ち位置はどこか？近年の小児の疾病構造の変化に伴い開業小児科医の役割は、疾病への関与という医師目線ではなく、辛さや困り感に寄り添うという、子ども目線・家族目線での関与がなくなってきた。であればこそその立場で把握や推測可能な環境を知った係わりが重要になる。例えば地域の小児医療環境、小児以外の医療環境、地域の社会環境、地域の養育・教育・療育環境、各家庭での養育・教育環境、各家庭での経済環境、各家庭での家族環境、子ども各自の持つ問題、各保護者の持つ問題などである。これからは子どもの成長という縦軸と成育環境という横軸とその周辺全てに係わることが虐待という子どもたちにとって最も重い病気に係わる上での、開業小児科医の責務であろう。